

令和七年度古文書入門講座第五回 積文／巻島

◆赤堀恒雄家文書 P 8902-76 「文久記聞 九」(群馬県立文書館蔵)

※38頁

(表紙)

┌

亥二月

御上洛之事

但、前巻方重書之事多し

文久記聞 従文久二戌六月 九

至同三癸亥六月

└

.....

※39頁

文久式年戌

六月朔日

国持大名、御譜代大名、外様大名
雁之間詰菊の間縁類詰

今日

上意之趣、誠ニ以厚 思召国家之御慶事

無此上難有事ニ候、昇平殆三百年其流弊

綱紀も相弛ミ武備御行届ニ相成兼候折柄、近来

外国之事務頻リニ御差湊(力)ひ相成、右御取扱振より

自然天下之物情ニ相響、終ニ奉悩

叡慮候ニ至、深く恐入 思召素々 公武之御間

柄聊茂御隔意被為在候御事ニ者無之候得共、何与

なく御情実御通徹ニ相成兼候者故より之儀

ニ付、速ニ 御上洛万端御直ニ被 仰上度との

.....

※40頁

思召ニ而則内々被 仰出ニ相成候併 御上洛之儀ハ

寛永以来御廃典ニ相成候御式ニ候得者万端取調

急速ニ御行届ニ相成かたく候ニ付、暫く之處年寄

共より御猶豫相願候所、此度之義者御旧例ニ

不被為拘格外御省略御行粧等万端御簡易ニ

被遊候 思召ニ付、急々取調次第被 仰出候、甚御急キ

思召候事ニ候、万事御誠実ニ 思召 御直々被仰上御

合躰御熟算之上、從來弊風御一統御武威被遊

御振張 皇国を世界第一等之強国与被遊候

御偉業被為建上者 天朝之宸襟を奉安、

下者万民を安堵為致度との思召ニ候得者

何れも厚奉得其意 御政事向御变革之

筋等各見込之儀も可有之候得者、聊も不憚

忌諱國家之御為第一ニ相心得、心底を尽し

可被申上候、猶追々被 仰出候義も可有之候間、飽迄も

其意を體し可被抽忠誠候也

右為心得於御黒書院御下段中務太輔申述

老中列座

文久弍年九月九日

未二月

御上洛可被遊旨被 仰出為御祝儀御三家方始

惣出仕有之於席々謁老中

.....

※亡頁

一右同断二付、為御祝儀尾張殿、紀伊殿方使者

被差出之、於躑躅之間謁豊前守

同日

来二月

御上洛被可被遊旨被 仰出候二付詰合布衣以上

之面々江於芙蓉之間老中列座豊前守申渡之

同昨九日之内

大目付

御上洛御用

松平對馬守

右被 仰付旨於新番所前溜和泉守申渡之

御上洛

同人

御道筋

御勘定奉行

根岸肥前守

見分御用

御目付

長井五右衛門

右被 仰付旨於同所同人申渡之、堀出雲守侍座

九月十二日

御勘定奉行

道中奉行

兼帶

根岸肥前守

来二月

御上洛之節御先江可罷登候

右於芙蓉之間老中列座豊前守申渡之

同十三日

高家

土岐出羽守

.....

※亡頁

来二月

御上洛之節御先江可罷登候

右於羽目間老中列座同人申渡之

来二月

御上洛御往還東海道御旅行之事二候然るハ

御道筋諸大名城下御休泊二茂可被 仰付儀二

候得共、此度之儀者諸事格別御手輕二被遊

領主者勿論下々迄無益之失費無之様二との

思召二而城々御旅館二者不被 仰付候、駿府

御城之外者都而宿々本陣并寺院等 御旅館二

可被 仰付、尤右本陣ニ而も 御座所等新規
補理候ニ不及、其外御道筋橋等も取繕ニ不及候
若難捨置候場所も有之候ハ、手輕ニ取繕
可申候

右之趣可被相触候

九月

九月十八日

金七枚時服三羽折 大目付

金五枚時服式羽折 御勘定奉行
根岸肥前守

同 御目付

同 長井五右衛門

京都江御暇ニ付被下

金貳枚時服式 御代官

金三枚時服式 竹垣三右衛門
御勘定組頭

木村董平

※43頁
.....
御勘定

金貳枚時服式、 同 土肥傳右衛門
同格 桜井又五郎

御徒目付 清水勝太郎

金貳拾兩ツ、 支配勘定

城戸登輔
大嶋東一郎

九月廿六日 京都江罷越候ニ付被下候

尾張大納言殿

右御登 城 御対顔来二月 御上洛被
仰出候、御祝儀被申上之畢る同断ニ而御供可被
在之旨被 仰出之

九月十一日之内

来二月 松平春嶽

御上洛之節御供 水野和泉守
板倉周防守

同断之節御留主 松平豊前守

同断之節御供 堀出雲守

同断之節御留主 田沼玄蕃頭
稻葉兵部少輔

同断之節御供 平岡丹波守
坪内伊豆守

室賀美作守
村衾出羽守

※本頁

大久保越中守
御目見

右被 仰付旨與相濟畢る
来二月御上洛之節 松平隱岐守
御供押

同断之節御留守ニ罷在 内藤肥後守
折々登 城可被致候 松平伯耆守
右於御黒書院溜老中列座豊前守申渡之

奥平大膳太夫
諏訪因幡守
土岐山城守
此節御暇被下割合ニ者候得共 御上洛之節御留守
罷在候様相達候ニ付而者當年御暇被下間敷候
榊原式部太輔

来二月
御上洛之節御先江罷出候様被 仰付之
右於御白書院縁頬老中列座豊前守申渡之
土屋采女正
土井能登守

同断之節御留主罷在候様
相達候ニ付而者當年御暇被下間敷候
右於芙蓉之間列座同前同人申渡之
※45頁

高家
京極丹波守
有馬兵部大輔
織田宮内少輔

来二月
御上洛之節御先江可罷登候
右於羽目之間老中列座豊前守申渡之
同断之節御供被 仰付候
御用中御簾奉行兼帯

講武所奉行
大関肥後守
御書院番頭
赤松左衛門尉
松平筑後守
御小姓組番頭
黒川備中守
小笠原志摩守
同次席
林大学頭

西丸御留主居格
講武所炮術師範役

大目付
岡部駿河守
同

淺野伊賀守
下曾根甲斐守

御目付

神保伯耆守
大井十太郎
山口勘兵衛
服部陽一
大久保權右衛門
長村五右衛門
杵浦正一

御使番

須田久左衛門
小出五郎左衛門
能勢金之助

※46頁

御使番

石野民部
小出内記
牧野左近
松平仲

同次席

講武所頭取
御書院番組頭

御小姓組与頭

御鉄炮方

御徒士頭

同次席

表御右筆組頭
御賄頭
御細工頭
御同朋頭
御数寄屋頭
同断之節御供被仰付之

澤勘七郎
一色仁右衛門
神沼左太郎
力石勝之助
石場斎宮
池田貞阿弥
高田三郎

内藤甚三郎
小栗伊右衛門
浅香傳一郎
横田新五兵衛
田村四郎兵衛
井上左太夫
諏訪庄右衛門
仙石播磨守
戸田寛十郎
渡邊為三郎
本多隼之助
小野整三郎

※右頁

同断之節御供被 仰付 御膳奉行 中野又兵衛
 御用中御膳所御台所兼帶 御膳奉行 長谷川又三郎
 同断御用中 御書院番
 江川太郎左衛門名代 土屋備前守組 柳原鐘二郎
 御鉄炮方御用被 仰付之

御書院番頭 神保山城守
 御勘定奉行 川勝丹波守
 御作事奉行 有馬帶刀
 御書院番組頭 河野七十郎
 御小性組番頭 駒井山城守
 御小性組与頭 仙石宇兵衛
 御納戸頭 深尾善十郎
 御勘定吟味役 立田録介
 同断之節 御先江可相越

新番頭

山名老岐守
 土岐大隅守
 水野岩之丞
 市橋傳七郎
 小野治郎左衛門
 土方八十郎
 戸田与左衛門
 溝口八十五郎
 奥澤甚左衛門
 高尾惣十郎
 明樂八郎左衛門
 稻生庄五郎

御持頭

御徒士頭
 御先手

小十人頭

尾張前大納言殿

※左頁

右於周防守宅同人申渡之、大目付竹本甲斐守相越ス
 十二月朔日

御座之間

尾張前大納言殿

右 御對顔来二月 御上洛之節

御先江御越被在候様被 仰出之

同三日 御目付

池田修理

御上洛御用取扱被 仰付之

同十日 高家

中条中務太輔

来二月 御上洛之節 御先江可罷登候

右於羽目之間老中凶書頭列座、和泉守申渡之

十二月九日

浪士取集御用取扱 講武所劔術教授方 松平主税助

右被 仰付旨於御右筆部屋様願老中図書頭
列座周防守申渡之
同十一日

本多美濃守
来二月 御上洛之節 御留守ニ罷在、折々登
城可致旨被仰出之

※9頁

右於芙蓉之間、老中列座和泉守申渡之

十二月十五日

来る二月七日 御上洛 御発駕被遊候段

紀伊殿始月並出仕之面々江於席之春嶽老中

図書頭列座和泉守演達之

同十八日

松平伯耆守代り

講武所頭取

塚原治左衛門

来二月 御上洛之節御供被

仰付之

内藤甚十郎代り

御書院番

赤松左衛門尉組与頭

夏目杵之丞

同断

同廿日

御勘定奉行

一色山城守

和泉守殿御渡

来二月 御上洛之節御道中筋領分知行有之

面々又者近辺より 御旅館江御祝儀申上御機

嫌伺献上物等仕候義無用可致旨被 仰付出候ニ付

而者春嶽、老中、若年寄其外見舞として使者

飛札使等差越候義者不及申用事之ため

家来等差出候義も堅無用たるへく候

※50頁

一御代官等道筋へ罷出候儀、且又手代等差出候義も

右準し無用可致候、尤寺院等同前ニ相心得一切

見舞等仕間敷候

右之趣可被相触候

高家

金拾五枚

中条中務太輔

時服三羽折

一橋殿 上京ニ付差添被遣候ニ付早々可致出立候

十二月廿五日

一御上洛之節、御道筋宿々并野間ニ而も都而盛砂

致し候ニ不及、尤道繕等之手当ニ困置候、砂者其

場都合次第集置可申事

一 道中宿々并宿間之百姓家二女、子供者軒下ニ差置
男者家之内、土間ニ平伏為致、村方ニ而者并木より
五六間も引下ケ女子共前ニ置、男者後之方ニ差置
可申候、尤出家座頭者差出申間敷候事
一 宿々並手桶見計忒三拾間ニ壺つ差出可申事
一 御途中ニ而若夜ニ入候義も有之候ハ、宿村共御道筋
家々ニ而所ニ有合候提灯又者行燈ニ而も差出し
可申事

一 御道中御道筋御上洛御用ニ付候往
来者格別所脇道方御道筋江出候旅人者御
通行前々日より人留可致候事

右之通、伺相濟候ニ付、御道筋ニ知行所有之

.....

※51頁

方江御通達可有之候事

伊沢美濃守
竹本甲斐守
大井美濃守
京極能登守
山口信濃守
池田修理

十二月廿七日

周防守殿御渡

近来御国人民品々御用途相勤、宿駅疲弊
不少趣被 聞召候、就而者来二月

御上洛之節陸路御旅行ニ而者一同之疲

弊も甚敷と深く 御患被遊候ニ付、御軍艦ニ而
御上洛被遊候旨被 仰出候、依之陸路通行御供

之面々ニも精々冗費相省候様被遊度旨被
仰出候、右思召之程銘々厚相心得可申候

右之趣万石以上以下并御供之面々へ不洩様可被達候

※上欄に「一書／愚（「慈」ノ誤力）／愛ニ作る」

周防守殿御渡

御軍艦ニ而来二月 御上洛被遊候ニ付、一旦大

坂 御城江御着座、夫方淀川通り 御乗船
にて伏見江 御泊り、翌日二条 御城江被為

入候之旨被 仰出候

右之通り万石以上以下并御供面々江不洩様可被達候